

令和 4 年 6 月 22 日現在

機関番号：28003

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19K11225

研究課題名（和文）認知症支援困難事例から始まる地域と大学との協働による地縁ネットワーク開発

研究課題名（英文）Development of Territorial Networks Starting from Difficult Cases of Dementia Support in Collaboration with Communities and Universities

研究代表者

下地 幸子（シモジユキコ）（Shimoji, Yukiko）

名桜大学・健康科学部・准教授

研究者番号：50804639

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：地域特性と地域の強みを活かし、個人の生活課題解決をはかる地域ケア会議と地域の住民組織介護を両輪として、専門職住民、大学との協働を強化し、Z区における地縁ネットワークを開発することを目的とした。基礎資料を得るため、地域包括支援センター、Z区事務所との共同で、独居の後期高齢者の30名の生活実態把握を実施した。実態調査により、高齢者が捉えた地域の強みやつながりの実態を明らかにし、当事者の意向を踏まえて、地域資源を活用した居場所づくりや、地域の見守りや生活支援を、Z区公民館や関係機関との活動により協働で推進することにつながる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

地域特性と地域の強みを活かし、個人の生活課題解決をはかる地域ケア会議と地域の住民組織介護を両輪として、専門職住民、大学との協働を強化し、Z区における地縁ネットワークを開発することを目的とした。今回、地域包括支援センター、Z区事務所との共同で、独居の後期高齢者の生活実態実態調査を実施し、結果を共有できたことは、当事者の意向を踏まえて、地域資源を活用した居場所づくりや、地域の見守りや生活支援を、Z区公民館や関係機関との活動により協働で推進することにつながると考える。しかし、COVID-19の影響により後期高齢者全数調査とはならず、また地域活動の中止や縮小でシマづくり活動の実施は課題となった。

研究成果の概要（英文）：Utilizing regional characteristics, strengths and considering a community care conference to solve individual issues of daily life and the care by community organizations as a pair of wheels, the study aimed to enhance collaboration with universities and residents who were professions, and to develop a territorial network in Z district. To gain the basic data, the survey to grasp the real figure of lives of 30 advanced elderly people living alone was conducted in collaboration with the community general support center and the office in Z district. As a result of the survey, actual conditions of strengths and relations of the community the elderly realized were clarified. Consequently, it is considered that cooperative activities with the community center and related organizations in Z district lead to promotion of daily life support: watching over in the community and making a place with utilizing local resources based on intentions of the parties

研究分野：高齢者看護

キーワード：高齢者ケア 認知症ケア 地域 協働 ネットワーク

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

それぞれの地域では、長い歴史の中で培われ生活に染み込んでいる地域文化や特性がある。本研究は研究代表者が関わっているK町Z区を対象地域とし、地域力を活かして、個別支援からの課題を地域全体の課題として共有・解決につなげるしくみづくりは、住民一人ひとりを支える地縁ネットワークとして住民主体の住民参加型の地域包括ケアの構築が期待される。また認知症、要介護状態の高齢者の課題からはじまった地縁ネットワークは子どもから高齢者まで全区民をつなぐ地域まるごとのネットワーク構築につながる可能性がある。

### 2. 研究の目的

K町Z区における地域特性(歴史・文化、医療・介護サービス基盤等)と地域の強みを(地域資源、愛着・つながり等)を踏まえ、認知症高齢者の支援困難事例から始まっている、地域の専門職とZ区住民との協働連携による一人ひとりを支えることができる地縁ネットワークづくりを目的とする。

### 3. 研究の方法

K町Z区をフィールドとしたアクションリサーチによる研究。1年目介入初期、2年目中期、3年目後期・評価期と位置づけ、ケア会議への参加、シマづくり会議の推進、当事者へのアンケート調査を実施する。

### 4. 研究成果

2019年度から2020年度にかけて当事者の基本調査として、Z区で暮らす後期高齢者を対象に訪問によるアンケート調査を実施。全数を目標としたが、COVID-19感染拡大の影響を受け全数把握の目標には届かなかった。COVID-19の感染は2021年度もおさまらず、高齢者の地域活動は殆どが中止、縮小となり、シマづくり会議の開催には至らなかった。しかし、アンケート調査は、Z区事務所、K町地域包括支援センターとの共同で作成し調査を実施し、結果を共有できたことで協働の第一歩となったのではないかと考える。また、得られたデータから、沖縄県北部地域のZ区における一人暮らし後期高齢者の困り事と不安の演題で日本ルーラルナーシング学会第16回学術集会にて以下の内容で報告した。

【目的】沖縄県北部地域にあるZ集落は水田が広がり伝統行事が盛んな農村地域である。我々は高齢者が住み慣れたZ区で最期まで暮らせるための地域づくりをめざしている。先行研究(下地ら,2019)では、専門職者からZ区の強みや課題を明らかにした。今回は当事者に視点を当て、Z区における一人暮らし後期高齢者の困り事と不安について明らかにし、今後の地域づくりに役立てることを目的とする。

【方法】1.研究協力者：Z区を担当する地域包括支援センターから情報提供を受けた75歳以上の後期高齢者(以下、高齢者)35名。2.調査期間：2020年6月から7月。3.データ収集・分析：全体調査として人的ネットワークや介護予防、地域づくり活動、困り事と不安等について半構造化面接聞き取り調査を実施し逐語録として起こした。本研究では、その中から高齢者の困り事と不安に関する回答内容を抽出し「原文」を作成し、「原文」から「キーセンテンス」を作成し、意味内容が類似している「キーセンテンス」を集め「サブカテゴリー」を作成した。さらに「サブカテゴリー」で類似しているものを集め抽象度を高めて「カテゴリー」を生成した。4.倫理的配慮：研究協力者に説明し、了解を得た。また個人を特定できないように情報保護に留意した。本研究は筆頭者の所属する大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【結果】1.研究協力者の概要：男性11名、女性24名で、70代5名、80代21名、90代9名であった。2.高齢者の困り事と不安：キーセンテンスが86、サブカテゴリーが19、カテゴリーが8、抽出された。以下、サブカテゴリーを< >、カテゴリーを【 】で表記する。高齢者の困り事として(表1) <体が思うように動かず、辛い>等の【思い通りにいかない歯がゆさ】、<家事が難しくなっている>等の【徐々に出来なくなる身の回り】、<痛みや疲労で動きづらい>等の【移動・外出の不自由さ】があった。不安として(表2) <病気・健康面への不安にかられる>等の【実感する健康への不安】、<やりたいことが出来なくなっている>の【楽しみ・自由

さの喪失】 <話し相手がなく寂しい>等の【共にする人がいない寂寥感】 <車の運転が出来なくなることに不安が募る>等の【身近に迫っている将来への不安】があった。一方で(表3) <子供の支援があるので困っていない> <先祖に守られているので不安はない>等の【生活上の困難・不安なし】もあった。

表1) 一人暮らし後期高齢者の困り事

キーセンテンスの例	サブカテゴリー	カテゴリー
足、膝、腰が痛くて長いこと座ってられないので、人が集まっているところには行きたくない	身体が思うように動かずつらい	思い通りにいかない 歯がゆさ
自分の心配はないが、離れて暮らす子供たちのことがいつも心配	自分の事より家族のことが心配	
体調が良いときは自炊できるが、悪いときは弁当を買っている	家事が難しくなっている	徐々にできなくなる 身の回り
畑の草むしりができなくなって手入れができない	屋外での作業ができない	
痛みで徒歩ではいけないので受診のときは家族(娘や婿)に送迎をお願いしている	痛みや疲労で自由には動きづらい	移動・外出の不自由さ
買い物をして荷物が重たくて持って帰れない	買い物不便になっている	
バスが40分に1本しかなく、待てないのでタクシーを使うしかない	交通の便が悪いので大変	

表2) 一人暮らし後期高齢者の不安

キーセンテンスの例	サブカテゴリー	カテゴリー
古い家で先祖からの土地をきちんと継承するまで元気でいられるか不安	病気・健康面への不安にかられる	実感する健康への不安
物忘れが増えてきて、火の始末や戸締りが気になり、家に戻ることが増えてきた	物忘れが増えている	
シニアカーの運転を90(歳)になってやめたので自由に出かけられなくなった	やりたいことができなくなっている	楽しみ・自由さの喪失
病気が悪化し、自分で動けなくなり話し相手がいなくなったので寂しい	話し相手がいなくて寂しい	共にする人がいない 寂寥感
夜中目が覚めると、何となく不安になることがある	夜になると不安になる	
以前転倒した経験があり、転ぶのが怖いので自分一人では受診ができない	転倒への不安がある	身近に迫っている将来への不安
年を取って体調の変化が大きいので、食事が詰まった時にどうすればよいのか心配	緊急時の不安がある	
目の手術をしたが、見えなくなるといふんなことができなくなるのがとても心配	将来の日常生活への不安がある	
買い物、役所の手続、銀行などすべて、車で移動するので車がないと何もできなくなる	車の運転ができなくなることに不安が募る	

【考察】加齢により日常生活行為が徐々に出来なくなることで他者に依頼する必要が生じていることは、困り事として捉えられやすく、介護予防サービスへつなげる介入がしやすい。しかし、後期高齢者が自ら外部に発信することはハードルの高い行動である。定期的な訪問や近隣からの情報、介護サービス事業所やZ区公民館、区全体で高齢者の声を聴き共有し、区の強みを活用した全体で見守るネットワークが重要となる。また、高齢者の不安や寂寥感は、日常生活の困難さとは異なり現象として捉えにくい。それらは多種多様で漠然とした内容が含まれ、解消することは容易ではない。不安や寂寥感は生活の質や生きがい感を低下させる(白砂ら 2019)。今回、話し相手が必要というニーズが明らかになり、傾聴ボランティア等の必要性が示唆され、Z区公民館や専門職者と協働で進めている地域づくりに活かしていくことが重要である。

<引用文献>

下地幸子,安仁屋優子,長嶺絵里子,佐久川政吉:認知症支援事例から始まる小地域と大学との協働による地域包括ケア構築の試み(第1報)(査読付き)名城大学総合研究 NO.28,2019

白砂恭子,淵田瑛津子:日本における高齢者が健康に独居生活を送れる条件に関する文献検討  
日本看護研究学会雑誌 Vol42 No.5 2019

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 下地幸子
2. 発表標題 沖縄県北部地域のZ集落における一人暮らし高齢者の困り事と不安
3. 学会等名 日本ルーラルナーシング学会第16回学術集会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	佐久川 政吉  (Sakugawa Masayosi)  (80326503)	沖縄県立看護大学・看護学部・教授   (28002)	
研究分担者	安仁屋 優子  (Aniya Yu-ko)  (60756998)	名城大学・健康科学部・助手   (28003)	
研究分担者	長嶺 絵里子  (Nagamine Eriko)  (00738148)	名城大学・健康科学部・准教授   (28003)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------